

令和2年度 大台町地方創生会議 会議録

日時 令和2年7月29日(水)

午前10時から12時

場所 大台町役場2階 会議室

出席者(敬称略)

- 座長 西村訓弘(三重大学副学長)
- 委員 松田尚之(百五銀行三瀬谷支店長)、西山隆明(松阪公共職業安定所統括職業指導官)、中村聖一(昴学園高等学校校長)、佐藤祐基(大台町商工会青年部部長)、遠藤実華(農業者)、呉山昌樹(呉山コルク工業(株)専務)、野田綾子(株Verde 大台ツーリズム代表取締役)、森本哲生(大台町副町長)
- オブザーバー 林健太郎(百五銀行公務部課長代理)
- 説明職員 辻本産業課長、山下国体推進室長、西出企画課主幹
- 事務局 岡本企画課長、岡本

開会(10時00分)

開会

○副町長

みなさんおはようございます。今日は10時という大変皆様方お忙しい時間帯に創生会議にご出席いただきましたこと心より厚く御礼申し上げます。そして平素はこの大台町の町づくりのために色々な面でご協力いただいておりますこと、重ね重ね厚く御礼を申し上げます。今コロナ一色になっておりまして私どもコロナから学ばせていただくことも多いわけではありますが、こうした状況が起こってきたという自然界の中での私たちの物事のとらえ方というものを改めて考え直していかなければならないとそんな思いをさせていただいております。

生きる力を育てる自然界でございますし、その中でどう町づくりを行っていくかということがこれからも大事な視点になってこようかと思っております。SDGsとかいろんな面でこれからこの17項目の考え方が、どう持続可能な大台町を作っていくか、そのことも非常に大事な点だと思っておりますので、皆様方には今日も色々な闊達なご意見を賜りまして町づくりに私どもそれをしっかり実行していくということで、捉えさせていただいておりますのでよろしくお願いいたします。

遅くなりましたが西村座長には、大変これまでもご厄介になっておりまして、今日も辛口のいいお話がいただけるのではないかと考えております。どうぞ今日の会議が有意義な会議になりますことを願ひましてご挨拶にかえさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

各自自己紹介

事務局説明

○岡本（事務局）

まず、はじめにお配りしました資料の説明をさせていただきます。

資料1をご覧ください。第1期の大台町まち・ひと・しごと創生総合戦略は、昨年度が計画の最終年度でございました。こちらは、戦略に掲げた基本目標の達成状況と、今年度からの第2期の戦略に掲げた目標をまとめたものとなっております。資料2につきましては、取り組みの指標として設定しております KPI について四つの基本目標と施策ごとに示したものとなっております。資料3につきましては、この後それぞれ事業を担当する産業課、企画課、国体推進室から戦略に掲げた事業の中から五つの事業についてご説明させていただきますので、こちらの資料をご覧くださいながらお聞き取りいただければと思います。もう1冊、令和2年3月に策定いたしました、第2期大台町まち・ひと・しごと創生総合戦略をお配りさせていただきました。

それでは、資料1によりまして、事務局から基本目標達成状況についてご説明させていただきます、そのあと資料3によりまして、担当課からご説明をさせていただきます。

基本目標1については、指標①の企業誘致については、2企業を目標に掲げて取り組んでまいりましたが、現状として町内に企業を誘致できる工場適地がなく、新たな企業の進出が難しい状況で、実績は0となっております。今後は、企業が進出できる新たな工場適地の指定など課題解決に取り組んでいきます。指標②と③については、農産物生産者の組織化や、地域資源の活用を促進する支援制度などの施策により、新規商工会員数51会員、新たなビジネスの立ち上げ10事業で目標を達成することができました。今年度からの第2期の目標としまして、商工会員数351人を目標としております。これは、平成30年度末の会員数と同数であり、人口減少に伴い減少が予想されますが、さまざまな施策を実施し、現状維持を目標としています。

基本目標2については、婚姻数は5年平均で29件と目標の32件に至りませんでした。出生数は、5年平均50人で目標を達成しております。第2期の目標としましても、第1期の目標を継続し、出生数50人を維持できるように努めてまいります。

基本目標3については、③の宿泊者数は目標を達成しましたが、その他については目標達成に至りませんでした。転入者と転出者の均衡を図るという大きな目標を掲げて取り組んでまいりましたが、実績として80人の転出超過となっております。第2期の目標としましては、転出超過を減少させ、-30人を目標としております。観光入込客数は、平成30年度の約10%増加の570,000人を目標としております。

裏面をご覧ください。基本目標4については、目標を達成しております。第2期の目標としましては、まちづくり町民アンケート調査での「住みやすいと思う人の割合」50%を目標としております。

この後、事業担当課から資料3によりまして、交付金事業と第2期の戦略に掲げた事業から抜粋してご説明させていただきます。地方創生交付金事業につきましては、外部有識者で構成され

る検証機関により評価を行うこととされておりますので、担当課の説明の後、委員の皆様から様々な角度からのご意見を頂戴したいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。事務局からの説明を終わります。

事業の進捗状況等説明

○辻本（産業課）

産業課辻本です。4月から産業課へまいりました。今回説明する事業について私も勉強しながら今日は説明させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは、資料3の①奥伊勢発えごま健康ネットワークプロジェクトについて、ご説明をさせていただきます。事業概要につきましては、平成29年度に国の地方創生拠点整備交付金を活用いたしまして、えごま油の搾油施設の整備を行いました。このプロジェクトは地域特産品の開発と合わせてえごま油を食生活に浸透させて、食を通じた地域ぐるみでの健康への取り組みを拡充していく、このような事業でございます。まず経緯でございますが、平成27年度にJAの女性会員の有志が中心となりスタートいたしました。健康と町の農地を守りたい、毎日口にするものだから安全安心にこだわりたい。このような思いを持った有志が集まりました。メンバーは共通の思いがありまして、一つ目は獣害に強い作物、二つ目が耕作放棄地の解消、三つ目が高齢者でも参加できる手作業で取り組める、四つ目が体に良いもの、このようなグループの思いに当てはまった作物がえごまでした。みなさんご存知かと思いますが、えごまは、しそ科で葉っぱは、お刺身に添えられている大葉のようなイメージでございます。このような経緯により女性を中心とした奥伊勢えごま倶楽部によるえごま栽培が始まりました。えごまの栽培を開始し、そして収穫されたえごまは、先ほどの地方創生交付金で整備した施設でえごま油として、商品化をいたしまして販売を開始いたしました。販売先はJAの直売所、道の駅奥伊勢おおいなどでございます。ここで重要なポイントなんですけれどもあくまでもこのグループは生産されたえごま油は会員が健康食として食べることを優先しております。そして余ったものを商品化することを基本としております。ここは設立時からの基本路線となっております。そして出荷した商品により得た収益を翌年のえごま栽培の経費に充てるこのような仕組みとなっております。右下に表がありますが、目標値に掲げた加工施設販売額は、目標値の430万円を大きく上回って1580万円ほど、新規えごま栽培者数は、当初13人でスタートいたしましたが、現在では、60人。原料えごま栽培面積は、当初50aから現在250aまで栽培面積を増やすことができました。今後の取り組みなんですけれども、もう既にスタートしているんですけれども大台町の特産品であるお茶とえごまの葉っぱをブレンドしてえごま茶として売り出そうというもので、この取り組みもすでに商品化されております。以上のように女性を中心としたグループが、えごまの生産から搾油、販売にいたる6次産業に向けての取り組みを進めております。今後は大台町のような中山間地の農業のモデルとなるべく事業の継続へと繋げていけるように町としてもサポートしていきたいと考えております。

続きまして、②奥伊勢ファームランド大台でございます。このネーミングは町全体を一つの農場と位置付けたもので、この農場を活用して将来に向けた農業基盤の確保、利用さらに地域活性

化につなげていこうという取り組みでございます。今日は具体的な施策の他分野との連携についてご説明をさせていただきます。事業概要ですが、高齢者の生きがいくりと介護予防の取り組みを組み合わせた農福連携事業を推進しております。具体的には集落のグループが実施するビニールハウスでの野菜作りに対して町が支援するもので、ハウス設置や当初の資材にかかる費用を町が支援して、そこを拠点とした高齢者の野菜作りと生きがいくり、さらには健康づくりに繋げていくものでございます。ビニールハウスは、天候に左右されない、季節をずらした作物を栽培できるなどの利点がありまして、雨でも活動ができることから計画的に継続して活動ができるということに繋がっております。昨年度は二つの集落の高齢者が一つのグループを結成いたしましてこの取り組みをスタートさせました。午前にはハウスに集合、体操、農作業、会話を楽しみ午前中に作業を終了するといった流れが基本で、徐々にではありますが、葉物野菜を中心に収穫にもつながっております。下の写真にありますように左がビニールハウス、真ん中はリーフレタスの栽培、このリーフレタスの写真を見ていただければわかるように高齢者でも作業負担が軽減できるよう高床式の栽培方法を採用しております。そして収穫された野菜は自分たちで配分いたしますが、多くできた場合は、道の駅などでも販売をしております、わずかではございますが、小遣い作りにもつながっております。比較的男性の参加が多く、これまで外出機会が少なかった男性の参加によりまして、集落内のコミュニティーづくりにも成果がでていと聞いております。今後は体力測定など、健康面介護予防などにつながっているか、データ分析をおこないまして健康づくりにも効果が出ているかを検証する予定です。また他の集落の高齢者からの問い合わせや連絡もありまして、この取り組みが他集落へ広がっていくことに期待をしているところでございます。

③情報発信、宿泊滞在環境の充実ということで、その中で具体的な施策として、観光インフォメーションの機能強化を掲げておりまして、本事業についてご説明をさせていただきます。観光インフォメーション機能の強化、道の駅奥伊勢おおい周辺の受け入れ環境を整備するため新しい観光インフォメーション等の機能を備えた施設を整備して観光の拡大を図る取り組みです。現在役場裏に積水ハウスとマリオットインターナショナルによるホテル建設が進められており、これまで工事用シートがかかっていたんですけど、本日シートも外れましてホテルの外観がわかるようになりました。このホテルは来年の春にオープン予定となっております。ホテルの概要は三階建てで二人部屋が72室だと聞いております。レストランやお土産店などは置かず、道の駅など地域周辺の店を利用して体験型の観光を楽しむといった計画となっております。道の駅をハブに地域の魅力を渡り歩く旅を提案する新しい旅のスタイルをコンセプトとしているようでございます。このように新たなジャンルの宿泊施設であり外国人観光客も主なターゲットの一つであるとも聞いております。町におきましても観光関係者が実施しております体験型プログラムや地域の名所旧跡ツアー地域伝統文化などへの参加なども提案して町の観光振興へつなげていきたいと考えております。

このようなホテルが全国に15建設が進められておりまして、三重県内には御浜町の道の駅パーク七里御浜と大台町の奥伊勢おおいに隣接して整備されることとなっております。このよう

なホテルが整備されるため、町では更なる観光集客を図る拠点として道の駅周辺の環境を整備するため新たな施設整備、観光インフォメーションや食事の提供などの機能を備えた施設ですが、このような施設を整備することを進めております。現在この計画につきましては、新型コロナウイルス感染症が世界中で蔓延しているため、しばらく事業を休止しておりますが、このようなコロナの情勢を見ながら進めていく予定でございます。ちなみに御浜町の同じホテルにつきましては、建設が既に終了しております、間もなくオープンする予定です。このホテルの状況も見ながら進めてまいりたいと考えております。いずれの二事業につきましても新しい第二期のまち・ひと・しごと創生総合戦略に掲げた事業でまだスタートしただけでございますので、本日はこのようなご報告しかできませんのでご了承いただきたいと思っております。以上で説明を終わります。

○西出（企画課）

企画課の西出でございます。資料4ページです。空き家等活用した関係人口増加プロジェクトということで、こちらも今年度から始めさせていただいております。前回プロジェクトの内容についてはご説明申し上げたんですが、再度簡単に申し上げますと町内に縦貫しております熊野古道伊勢路沿いをこれまで進めてまいりました空き家バンク空き店舗バンク等々で利用される方々がお集まりいただきまして、ギャラリーやゲストハウス、カフェなどが出来てきたということで、これを更に促進しようという事業でございます。今年度は左下でございますとおり、これもコロナの影響なんですけど、先日ようやく地域の方にこれらの取り組みの拠点となります旧川添郵便局の内覧会を終えたばかりです。内覧会は、町として、また住民団体としてこの界隈を賑わいのある区域にしたいんだということをご説明申し上げました。引き続きこのような場を設けながら、地域住民の方のご意見を伺い、どういった地域を住民の方が望んでいるのかという声も反映しながらこの区域をより賑わいのあるエリアにしていきたいと考えております。今年度は引き続き地域住民の方々と意見交換やヒアリング等を行いながら空き家を活用しながら地域振興に結び付ける計画を作っていきたいと考えております。また同時に空き家の調査も実施しております、現在運用しております空き家データベースにも反映していきたくて考えております。既にですね、クラフトマンストリートということで、手仕事をお持ちの方を誘致したいということで進めていますが、3件の方と交渉を進めておまして、今のところ順調に移住、開業に向けて進んでおる状況です。またこれも今月に入ってからなんですけども全国組織となりますが、古民家再生協会という団体と協定を結びまして空き家を活用した地域振興に、より専門的な見地から指導支援いただけるような体制も構築いたしまして進めてまいりたいと思っております。それと今日お越しの委員の野田さんにもお世話になっておりますが、ワーケーションといいますか、サテライトオフィスといいますか、そういうテレワークも推進しながら空き家の新たな利活用、もしくは人を誘客する糸口を広げていきたいと考えております。ご紹介いたしました取り組みは、いずれも今月、先月始まったばかりですが着実に関係人口を増やすために進めてまいりたいと思っておりますのでどうぞよろしく願いいたします。現在この表の右下に今現在空き家調査をしておるんですけども2015年から見ていただきますと空き家の件数は520、530件に上っていくんではないかなと想定しております。この2015年は300件程度でしたので、僅か5年でこれだけの伸び率を示してお

りますので、根本的な空き家の解決には至っていませんが、こうした課題を抱えながら進めてまいりたいと思います。以上でございます。

○山下（国体推進室）

それでは私の方から 5 ページ、ボートの町大台町への躍進プロジェクトにつきましてご説明させていただきます。事業の概要でございますが、ここから車で 2、3 分のところにあるんですが、県内唯一の漕艇場であります奥伊勢湖漕艇場等の整備改修を行いましてボート競技施設として充実をさせまして合宿の誘致等を通じまして町外からの来訪者、宿泊者を増やし関係人口、交流人口の拡大につなげていきたいというものでございます。令和元年度の事業費としては、2 億 6 千万円ほど使わせていただきまして漕艇場に隣接いたします B & G 海洋センターの艇庫、審判棟、管理棟の改修工事、トレーニングマシンの購入等をさせていただきました。次に今後の取り組みということでございますが、三点ほど上げさせていただきました。まず一点目でございますが、スポーツ拠点の整備ということでございます。体育館等の整備は済んできておるんですけどもトレーニング器具の充実ですとかコースの整備等を進めていきたいと考えております。2 点目としましてボート競技人口の拡大ということでございます。県内唯一の漕艇場ということですからしい環境の漕艇場があるんですけども、競技自体マイナーということもございまして、なかなか競技人口が増えていないという状況でございます。ボート教室の写真がありますが、子ども達に少しでもボートに親しんでいただくという取り組みも進めております。地元大台中学校にボート部もあるんですけども部員数も増えていないという状況でございます、なんとか競技人口を増やしていきたいと考えております。三点目の合宿の誘致ということでございますが、すばらしい漕艇場ということで、訪れていただいた方には非常に評判は良いわけございまして、周辺の宿泊施設と連携しまして合宿等の誘致を進めていきたいと考えております。その下に K P I ということで漕艇場利用団体数ということで目標を掲げております。今現在、漕艇場の利用は地元の中学校、高校、ボートクラブとかそういうところだけなんですけども、先ほど言いました合宿等の誘致等を進めましてボート場を利用させていただく団体を増やしていきたいと考えております。漕艇場を活用いたしましてスポーツ振興、観光振興ということで図っていききたいと考えておりますのでよろしく願いいたします。

意見交換

○西村座長

大きく三つのカテゴリーの事業のご説明があったと思いますけれども、いかがでしょうか、ご意見ご質問等あればと思いますけれども。えごまに関して遠藤さんどうでしょうか、こういった農業の取り組みというのは。

○遠藤委員

えごまは近くでも作られていまして、皆さんすごく前向きというかいいい感じで、どんどん増えてきているようなので、このまま続いていけばいいなと思います。

○西村座長

えごまってどれくらい期間がかかるのでしょうか。

○遠藤委員

6月ぐらいに植えて10月に収穫。その間に除草とか摘心とか。つきっきりでしなくてはいけないということではなくて、収穫は大変そうですけど大勢でされてて賑やかでいいなと思います。

○西村座長

2. 5 aは、まとまってはないですか。

○辻本（産業課）

まとまってではないです。

○西村座長

一つの風景になっているんですかね。

○遠藤委員

今まで使われていなかった空地というか放棄地というか管理はしているけど使われていなかった所が、えごまでどんどん使われているような感じですよ。すごくいいなと思います。ちょっとしそ科の匂いもして。

○西村座長

大台町と言えばえごまというふうになるのかと考えたときに、人数的にも面積的にもすごく成長している。小遣い稼ぎにはなるし、ちょっとモチベーションが上がるのかなと思うと主たる産業というわけではなくて、主婦の方々が副業的に自分の空いた時間できちっと小遣いが稼げて生活の足しになって、尚且つ健康にも良くてコミュニケーションもとれて、それが普通にこの町の風景になってとなると定着すると思う。というような見方で見たときに面白いかなと思ったので、遠藤さんの農業の立場から見て、本格的にやるには難しいかもしれない。全体の取り組みの中で一つひとつがどうやって定着するんだろうなと思ったときに形が出来ているなと思った。いかがでしょうか。オブザーバーの林さんどうでしょうか。こういう取り組みというのは。

○林（オブザーバー）

面白いかなと思います。まず健康というのがあるので、この地域の人々は年齢層も高いと思うので、このプロジェクトも次の奥伊勢ファームランドも結局は同じなかなと思いますが、高齢者がいかにこの地域らしく生きていくかということで面白いのかなと思います。

○西村座長

この60人というのが年齢構成はどれぐらいですか。

○辻本（産業課）

ほとんどが60代70代です。

○西村座長

次のとも絡んでいくんですけども、農業で一つの業として成り立つのではなくて、町の次の福利厚生ではないですが健康づくりも絡めながら、生きがいみたいなこと。この町に住んでいいなと思う割合が、KPIを達成しているのを見ると事業目的は何かという時にこの町に住んですごく健康で楽しいよねということが、出来ればすべての世代で思ってもらえればいいのかなとな

ると、一つの施策として60人の方、その人たちが町全体の中で何%ぐらいの高齢者の中に響いてきているのか、次のところでおっしゃってましたけれども、この地域以外の所でも興味を持つ人が出てくれば、こういう取り組みが一つは農業振興のように見えるけれども健康管理とその人たちの幸福度を上げていくということにつながっていくのを見ていくと、ここに住むのは良いよねと下の世代につながっていく非常にいい効果かなと思って見ていたんです。いったい65歳以上の方って何人いらっしゃるんでしょうね。

○辻本（産業課）

高齢化率は4割超えています。

○西村座長

人口9,000人強の4割、4000人ぐらいの高齢者の方が幸せになるときに、これが60人と次の何人かわからないですけども、それらを広げていったときにどれぐらいの割合の人にやってもらえるだろうなど。そうするとどれぐらいの面積が変わって行って、どんな地域にどんな作物がとれて、そういう町の雰囲気も変わってくると思うんですね。そこら辺を見越しながら目標点みたいなものを見ておくことが、いい取り組みだからこそ、その先を見据えた計画が必要かなと思った。総合的に全事業がうまく組み合ってますよね。なので、一個一個を切り離さずにこれが与える影響を含めて考えて町全体に与える影響度をどこまで伸ばせるのかっていうのはしっかり考えていく方がいいかなと思います。というように思った以上にうまくいっているなと思いました。

野田さんどうでしょうか。全体も含めて。

○野田委員

本当にいい地域だと思っていて住みやすく自然も豊かでお金じゃない豊かみたいなものを日々享受して生活をさせてもらってます。すごくこの取り組みも例えば自分が60歳になったとき70歳になったときにこんなことを先進的にやられてる方がみえてすごく楽しそうだなと思ったりしています。ただこういういい取り組みをどんな人がどんな風にやっているのかを外へ知らせるという事をもう少ししていくべきなのかなと思います。外の人に知ってもらおうとか来てもらおうとかにつなげたいんだったら、こういう町づくりだとか農業も含めて観光だけではなくて、地域の人やどんな人がどんなことをやっているのか全体的な発信というのをみんなでやっていけるといいのかなとすごく思いました。DMOでやらしてもらってるんですけども、どっちかって言えばDMCのカンパニーの立場にすごく寄っているのもうちょっと地域づくりみたいな全体的にこういう地方創生みたいなことを発信するというのを誰かがやってもいいのかなと、前の5年前の総合戦略のKPIでアクセス数200が×になっていたけど、それって空き家だとかすごく小さなトピックでの発信でやっぱり200ぐらいしか稼げないと思うんですね。大台町の町づくりだとか観光だとか色んなことを総合的に発信するというのがあると、色んな立場で大台町を知ってもらえるので、そういう取り組みをもしかしたらすべきなのかなと思う反面、ターゲットを絞って売り込むようなこともしていかないとと思うので、ふわっとした情報発信じゃなくて尖ったことをやって並行して出来るといいのかなと思いました。もうちょっといい取り組みを知って

もらうことがあればいいのかなと思いました。

○西村座長

知ってもらえるのも、お金じゃない尺度で幸せを感じたと、今回コロナで色んな人が感じ始めたと思います。野田さんがおっしゃったことに意味があって、自分が知らないってことは町の人たちも知らないんじゃないのか。町内でもう少しえごまのことを 60 代の方はみんな知っているみたいになってくると、選択肢として別のやり方がファームランドみたいな自分たちでやろうと思ったら色んなものが作れるというのが、どこまで知らせているんだろうなど。今の発信の中に町内発信がいるよね。町外の人にこういう生活ができる大台に来てくださいと言う勧誘をするのであればそれもOKだし、これを町の人たちが望むのかなというのも含めてね、高齢者のみなさんがここで生きていきたいと思えるいいパッケージができていると思うんで、あとはその前の世代ですね子育てをしている世代とかもう少し頑張らなくてはいけない世代の人たちにこのまちの魅力を伝えるというのは、今野田さんがおっしゃったように、将来こうやって生きていけるよねというだけじゃない何か尖ったものが必要かもしれない。西山さんいかがでしょうか。

○西山委員

栽培者数が60人ということなんですけど、どのように取り組まれたんでしょうか。

○辻本（産業課）

当初はJAの会員さんが中心で、ロコミでどんどん面白い取り組みということで広がっていったと聞いてます。

○西山委員

雇用という観点から考えますと、松阪管内の職業相談をしているんですが、地元働き口がないという声もありまして、コロナの関係もありまして、求人倍率が1倍を切ってしまっていてかなり三重県下の中でも低い状態にあります。就職を斡旋するということが出来ませんので、このプロジェクトで経営が出来れば求人を確保できると思いますのでそういった展開もされたらどうかと思います。

○西村座長

こういったえごまが、業として成り立つようになれば若い方が業としてできるかもしれない。この5倍ぐらいやっていけばそういうことが見えるのかもしれないですね。方向性も含めて、この楽しさをなくしてはいけません。佐藤さんどうですか。

○佐藤委員

初めて参加させていただいたんですが、大台町民ですがこういうプロジェクトをやっていることを知らなくて、今回初めてお聞きしてすごくいい取り組みだなと、全体をとおして一貫性もあるしお年寄りが多いのは今後避けられない状況なので、そこをうまく生かしつつ健康づくりとコラボしてやっていくっていうのはすごくいい取り組みだと思います。逆にそれだけいいことをされていることを知らないという現実があったいなと思います。今大台町に住んでるんですけど、大阪に住んで都市部の方はコロナで農業とかそっちに目が向いてる人が増えてるなど肌ですごく感じて、今までの成功の価値観も変わってきてる。それが今までの資本主義の成功と違

うんじゃないかなと、若い世代の方がちょっと気付かだして、そこで食料自給率が36%かなんかそのところも問題になっていくうえで農業を気にしだしたり農業に目が向いてるというのは若い世代でもあって、結構聞かれることが多いですね。農業出来る土地ないかとか、三重県内でも街へ行くと結構聞くのでじわっとこっちに目が向いてくるきっかけになるんじゃないかなと思います。

○西村座長

その肌感覚結構正しくて、今出張が出来なくて、オンラインで世界中の人と毎日のようにディスカッションしてるんですね。オンラインだから直接会えないって不利はあるけど逆に言うとコミュニケーションとるには日本中がオンラインを経験しちゃったんで距離はハンディキャップじゃなくなったんですね。一つの仕事で一か所で働くことが大丈夫なのかということ皆さん疑問を感じ始めたのと、やってみたらそうでなくても生きていけるなというのが、今回2、3か月皆さん経験してきたんですよ。だから在宅勤務みたいなことって、結構やれてるよね。これからずっとやるよと宣言している会社が出てきたり、本社を無くしたり、どこでも本社みたいに住みたいところで働けるようにしたりとか。大台町に移住してきてくださいって考え方もあるけど、大台町である時期仕事してくださいってやり方もありかな。大台町に仕事が無くてもいいんですよ。会社の所在地は東京でいいんだけど勤務地は大台町。ワーケーションって話が合って今ワーケーションで言葉を変えましょうって話をしてるんですね。バケーションで来るって感覚ではなくてステイなんだと。例えば半年間ステイしながら、半年間は東京にいたり違う所を回ったりそういうイメージ。大台町どうするかを考えたときに空き家に住んでもらってもOKだし、空き家にある時期住んでもらってある時期東京にいてもかまわないっていうやり方をしていく。整理しなくてはいけないことって別のことになってくるんじゃないのかなと思って、県庁とも話をしていて、最も重要なことは、医療と教育と足回りですよ。医療の充実ではなくてここに来て普通に医療が受けられる安心感があればいい。教育に関しては、昴学園さんが来年度から短期留学を受け入れられるんですね。東京からの1年だけの短期留学、あれも最初議論している中では1年間は難しいんじゃないかと話してましたけどもオンラインでできるから1年留学ってそんなに難しくない。色んな学校の子たちが、大台町の小学校、中学校、高校と3か月だけ大台町に来て不利にならないって条件ができるかもしれない。ここで受ける教育プラス例えば東京の教育を足すんだったらオンラインで補修すればいい。単位の互換性も含めて教育の互換性がとれる。教育でも都会とつながっていくことが出来ればここに住むこと自体が、ずっと住んでもいいし3か月だけでもいいし、ヴァケーションできてもいいし、ただし同じ生活が出来ますということが非常に重要なので、そういう基盤整備のほうが重要じゃないかと。その基盤の所は三重県に来たら安心してオールスタンダードだよっていうふうになってきたら三重県に来たらどこでも働けるよねとなってきたら、家族ぐるみで、三か月、一年、場合によっては移ってきてもいいということになる。大台町もそういうことを目指しながら、大台町に来たら普通に生活出来ますと、東京で昨日まで勤務していたのと同じ仕事しながら子どもたちも同じ教育をもっとのびのびしながら教育が受けられるとなると差がなくなってくる。一気に変わらないかもしれないけども佐藤さ

んが言われたようにじわじわくる。じわじわ来るときに大台町としてその感覚で準備をしておくことが重要になってくる。楽しいことが作れそうだなとあとショートステイみたいな感じで来て町を歩いてってというのは出てきたのでいいかなと。もうちょっと長期で来るときに空き家対策の空き家なのかなと。どういう人たちに来てもらってどういう町でどういうコミュニティーをここで作っていくのかっていうことを町として町民の皆さんと議論することが重要なのかなと思います。過去10年間の一人当たりGDPの伸び率が一番低いのは東京です。一人あたりの取り分はこの10年間で東京が1番伸びなかった。一番伸びてるのは岩手です。三重県で市町単位で計算すると最も伸びたのは南伊勢町です。残っている生産年齢の人たちの稼ぐ力は地方が都会を逆転し始めているという現象がみえてきました。ということは働く若い人たちにとってチャンスがきてるんだよねってことを逆に人口減った分だけ可能性があるということをごどこかで見出していくという事、ここに足りないのはそこかなと思った。若い人たちにとってここがチャレンジする場所っていうのがあれば、たくさんなくてもいい。ここに住んで子育てして、やれることがある町に見せていく。例えばえごまの延長上に雇用が出来るかもしれない。例えばマリOTTが出来たときに大黒屋みたいな店がもっと出来るかもわからない。ヴィソンが出来てきたらそこに出すのに農業がもう少し稼げる。何人ぐらいそれで、農家とか飲食だとかを作れるのかを計算しながら、若い人たちに挑戦できる町をつくっていくのもありかなと思う。

呉山さんどうですか。

○呉山委員

私もこの活動自体知らなくて、えごまっていう健康にもいいものを町の人たちが作っていることをもっと地域の人たちや世間にも知ってもらうことが大事だなと思いました。クラウドファンディングに目を向けていただいてですね、そのクラウドファンディングは、消費者に直接支援していただけるプロジェクトなんですけど、今回のえごまもですね、JAさんとか地域の奥伊勢おおいで販売されているんですけどもこれをもっと世間に知っていただいてクラウドファンディングを使うことで直接ひとり一人にダイレクトに情報を送れるとそういったことをすることで、経済的にも大台町としての取り組み、ストーリーからこういったものが出来て、また新商品でえごまのお茶を作るとか、このものがやはり面白い内容になっていると思うんですよ。それをちゃんと組み立てて知ってもらえば、経済的にもプラスになるんですけども商品が元になって、より外に大台町ってなんだろう。この商品ってなんだろうという感じで世間に知ってもらえる手段になっていくんじゃないかなと思います。

○西村座長

クラウドファンディングで例えば出資していただいた方には、えごま油をお返しするみたいな感じで、今知らせるという事が非常に大事なんです。色んな人たちに知らせるのが重要ではなくて、誰に知らせるのか、どれくらいの人に知ってもらえたらいいのかも含めて考えると、知人ぞ知るっていうのも結構面白いのかなって思います。クラウドファンディングは知人ぞ知るになるかもしれないですね。例えば300万を目標にしてやることによって500人の人をつながる。一人1万円で300人の人をつながる。1対1の取り組みが300人に増えるだけで30

0人がまた勝手に発信するんですよ。密度の濃い関係性を持った人たちがそのことを伝えながら周りに配ってくれるネットワークを地道にやった方が知る人ぞ知るで意外と支えてくれるかもしれないですね。クラウドファンディングのようなもので、こういう事業の響き方を確認するのもありかわからないですね。もし響いてくるんだったら関係人口を作るためにも響いた人たちに大台町のファンになってもらってここに来てもらう。知らせるのもインターネットでホームページつくりました。っていう発信とか、何とかフェアに来ましたっていう、なんとなく砂に水を撒くやり方ではなくて、砂の上にもピンポイントで土を置いてそこに滴下で水を与えるような感じで花を育てるような、なんかそういうことってのはピンポイントでできるんじゃないかなって今の呉山さんのお話っていうのはそういうことにつながっていくのかなと感じました。とてもいいことをしているってことは皆さん納得してもらったんで、これをどう生かすかということに次の知恵を出していただくといいのかなと思います。中村先生いかがでしょうか。

○中村委員

初めてなので、色々新しい取り組みをお聞きして自分の考えとして今考えがまとまってないのが正直なところです。

○西村座長

昴学園さんにもこういう取り組みを高校生に知ってもらうことも面白いと思います。大台町の取り組みを先生方に熟知していただいて、それを活用することが高校生にとって色んなことを考えるきっかけになるのであれば、今回のえごまの話であるとかファームランドの話っていうのは、子どもたちの自身の生き方についても影響すると思うんですよ。単にどこかの大きな会社に就職ではなく、田舎っていうのは面白い可能性があるんだよねということを知っておくのはよりいいんじゃないかと思います。

マリOTTとか空き家についてどうでしょうか。遠藤さんは、マリOTTがくることによって何か儲かりますか。

○遠藤委員

ホテルの中に土産物店とか飲食店が無いという事なので、こちらに泊まれるお客さんをターゲットにした商品を道の駅に置いてもらうとかできるのかなと思います。

○西村座長

これすごく大事だと思うんですよ。御浜は道の駅に近いところで、色んな食材が手に入り、場合によっては、そこで食べられると。大台も道の駅が効いてくるのかなと、地元の食材を入れながら、これどんな部屋になるんですかね。

○辻本（産業課）

全室2人部屋で、72室です。客室にはバスタブはなくシャワーブースだけです。御浜町の情報では、共有のキッチンがあるようです。

○西村座長

バーベキューができるスペースがあるとか、手軽に来たらそこでバーベキューができる場所を町とか、道の駅が準備するとか、アクアプランネットの福政さんと話をしたときに、東京ドームで

バーベキューをしている。何も準備しないで来たらそこでバーベキューができる。都会の人の感覚だとそういうのがあるかもしれないので、道の駅に来たら、海産物もあるバーベキューセットがあつて芝生の上でできるとか、町としてそういうのを用意するのもありかわからないですね。宿泊客以外の人もそういうのを使う可能性もある。体験型がきっかけになるかも知れない。

野田さんもこういう人たち向けに体験型をやるわけじゃないですか。ここに飲食も絡めながらやっていくというのを町として作っていってもらいたいのもいいのかもしれないし、野田さんがやるのかもしれないですけども。ここと絡めて何か考えていますか。

○野田委員

もちろん、マリオットにお泊りになった方を奥に奥に、宮川沿いの奥に誘客するようなツアーですとか、アクティビティーを考えています。たぶん町内全体の宿泊者数を過去5年間で考えたときずっと減少傾向にあるんですよ。ゲストハウスは増えてきました。ティーフィールドヴィラのようなインバウンドに対応できる所も増えてきました。でも全体として宿泊者数は、減少傾向にあつてマリオットが来ることによってもちろん全体の宿泊者数は上がると思うんですけど、そういう課題が見えなくなる影響はあると思います。マリオットが来ることによって宿泊者数がたくさんになりましたハッピーです。って感じになってしまうのが、気持ち的にちょっと心配だなと思います。既にある宿泊施設が潤うような準備が必要かなと思います。

○西村座長

稼働率はどれぐらい考えているんでしょうか。7割ぐらいですか。常時50組泊まっていれば、すごい数ですね。2人だとすれば、100人。毎日100人の人たちが何かを食べる。この地域にとって大きな話になりますね。そういうことで、アクティビティーが増えてくれば、さらに宿泊したいなという需要が増えたら、民泊も空き家対策であるんですか。

○西出（企画課）

今お話しさせていただいてるクラフトマンの方もいずれ民泊やゲストハウスがしたいという希望があります。課題としては、それに見合った物件の提供体制というのがあるんですが、前向きな交渉が進められています。

○西村座長

最低限の条件がみんな揃っているというのは町としていいです。大台に行ったけど良くなかったということが一個でもできると、大台に行ったら良かったというのが共通項になるといい。古民家といっても古いものが好きじゃないっていう。古い雰囲気を感じながら普通の生活ができるとか、非日常を体験できるとか、色んな所のクオリティーを高めないといけない。最低限の共通項を整える作業は町として考えておいてもいいのかも。マリオットに泊まった人が、今度は古民家に泊まってみようかなとか。食事を古民家でとって、この雰囲気いいねってなったら今度は泊まってみようとか。全体の町としての雰囲気作りですよ。これから毎日100人の人が外から来るってなったらやってく効果はある気がします。というスタンスで見えていくと事業が全部連動しているのかなと思います。通りの雰囲気ですね。通りの外観が揃ってくると一つの雰囲気が出てくるといいのかなと思いますね。

○松田委員

道の駅に関しましては、周辺の環境整備を現状は保留しているような状態で、そうは言ってもここがオープンするのは間違いないですし、オープンしたときに飲食する所が一番抑えなきゃいけないところが、そこを抑えないとリピートもついてこないと思いますので、食べる施設がない、どこかで食べなきゃいけないとなったときに、スーパーがあるんでそこへ行かれてお弁当を買われたら地元にも何も貢献しないまま帰ってしまうので、どうせならそこで地域と密接な関係を結びつけるような飲食であったり、先ほどバーベキューの話もでましたけど、そういう環境を整備していくということが重要なじゃないのかなと思います。多分私も泊まって食べるところがなかったら、スーパーで済ましておこうということになる可能性もあると思うので、そこら辺は、ある意味ピンチという意味でとらえてもらってもいいんじゃないのかなと思います。全体の話で申し上げますと、金融業を担当してますので、コロナウイルスの影響がとても大きくてですね、しかもちょっとずつ大きく傷口が広がっているのが現状です。劇的な変化が身の回りでも起こっておりますので、この総合戦略に関しましても、コロナウイルスの影響を受けて数値であったりとか項目であったりとかをある程度早い段階で見極めて見直していかないといけないのかなと思っております。全体的な戦略は皆さんの意見のとおりすばらしい未来を感じさせられるものなので、大台町の町民も含めて、周知をしていけば成功に近付いていくと思います。

○西村座長

ワクチンができたからすべてが変わるということはありません、おそらくインフルエンザのワクチンと同じような感じになるでしょう。打っておいたほうがなった時に症状が治まりますよと。ウィズコロナという日常をとということになれば、こういうところが有利かもしれないですよ。三密を避ける、コミュニティが見えているので、安心な場所でもある。こういう所でじっくりと住みたいとか、こういう所で仕事をしたいという人が、増える可能性が高いと思った方がいいかもしれませんね。それは一つのトレンドとしてではなく一つの形としてなるんじゃないかと思う。だからこそ観光対策みたいな感じではなくて、生活の環境整備みたいな感じで捉えていく。空き家対策やマリOTTで来ても本当にここにいて病気大丈夫なのかなって、長期で来た時に教育はどうなんだろうなって、子ども預かってもらえるのかなって、旅行者が子ども預かってくださいっていう時代が来るかも知れない。旅行者は3か月くらいいる旅行者かもしれない。ということを考えていくとそういう人たちにどうやって食事を提供しようとかを考えていくと、外に売りに行くより中に売りに行った方がいいんじゃないか。農作物を一品をたくさん出すのではなくて、バーベキューセットみたいに多種類を提供できる形の方がいいのかもしれない。サービス業にしても毎日100人ぐらいの人がいるんだったら、その人たち向けの理髪店が出来てもおかしくない。そういうふうに色んなことを考えていくと、基盤が変わってくるんだよねってことで、ビジネスを考えていくのもいいのかもしれない。空き家プロジェクトとか、マリOTTと絡めたときに町としてどうやっていくのかを考えれば少し道が見えるんじゃないかと思いました。

林さん地方創生的に見てそんな感じでいいですかね。

○林（オブザーバー）

やっぱり観光に来てもらうためには、今住んでいる方々が暮らしていいんだなと実感してなかったら、来ていただいてもおもてなしもできないと思います。この写真を見ると、えごまを楽しそうに収穫しているわけですがけれども、この方々が本当に楽しく暮らしながらやっていたらですね、外向けに発信していけば観光客が増え、その方々が住みたいなとなるんじゃないのかな。それが地域の特性を生かした将来性を見つけていく方向なのかなと思います。住民の思い、方向性を確認していくことが大事かなと思います。

○西村座長

地元の人たちの生活を充実させることに特化した方がいいかもしれないですね。懐の深さみたいな感じで、観光客も長期滞在の人たちも受け入れましょうみたいな感覚で、地元の人たちが行く居酒屋には、おいしいから観光客も来るよね。地元の人たちが利用するような飲食なんかをみんなレベルを上げていきましょう。歩いていけるような店が今まではニーズがなかったものが、出来てきたら観光客も行きたい店になるし、1件か2件かあれば、毎日100人の観光客が来るようになったら、安定した経営ができるようになったら、地元の人もしめるとちよつと粋な飲食とか、飲み屋とか、そういう所が町にも出来てくればいいのかと。町の人が歩いて楽しめるような所になれば、いいのかなって。地域が離れている中で足だけですよね。今後ね。多気町で話をしたんですが、町営バスを巡回させる必要があるのかと、ピンポイントでこのバス停に行けば10分に1本10人乗りのバスが来る。1路線だけのピストン輸送でもいいんじゃないかと多気は簡単な話で、松阪駅と1箇所だけ繋げばいいんじゃないのかと、この大台の中で飲みに行くときにここと、例えばさっきの空き家ストリートみたいなところを1本でピストンでもつながるような足が確保されていれば、町歩きなんて、慣れないところで車運転したくないし、歩きながら楽しめるっていうときに、この地域と違う地域をピストン輸送みたいな感じでつなげばいいのかなと。巡回バスとかものすごいサービスを過剰にしていると思うんですけど、ピンポイントの主幹路線だけを作っておいたほうが、交通っていいんじゃないのかなと思います。

クラフトマンストリートを作って、そこがメジャーになってきたら、クラフトマンストリートとマリオットの近くの駅を結ぶ1本だけの10分に1本10人乗りのマイクロバスが動いてる町でもいいのかなと思います。そういう考え方もあると思う。すべてをやっていくと大変だけれども。

最後のところボートの町大台について皆さんのご意見いただいてなかったの。佐藤さんボートはやってないですか。

○佐藤委員

ボートはやってないです。商工会青年部にボートのコーチがいるので話は聞いて情報だけはあるんですが、大台町に帰ってきてから知ったんです。ボートが有名でボートで国体に行ったりとかっていう歴史があってという。ボートの聖地というイメージはボートをやってる人は持っているのかなと。一般の人は持ってないけどボートをやってる人は知っている。ボートイコール大台町みたいな要素みたいなものはあるのかなと思います。ボート人口を拡大するっていうのは難し

いじゃないですか、ボートをやるって、環境があるからボートをやるだけで、これを町の人がボートをやりたいです、とはなかなかならない。その辺は仕方がないのかなと思っています。それよりもボートをやっている風景とか、ボートを体験したことが無い人が知るきっかけみたいなことがいいのかなと。SUPとかもそうですけど、SUPって写真でみたら格好いいじゃないですか、でもやったことない。そのきっかけづくりはできるのかなと。

○西村座長

大台にすごくいいものがあるんですね。三重県でここしかない。漕艇場は、全国的に見てどれくらいのレベル感なのでしょう。

○山下（国体推進室）

ボートのOBの方が、全国を回られている方がこの前来ていただいたんですけども、本当に1位、2位ぐらいやと。

○西村座長

たまたまですけど、山形県の西川町へ行って、あそこはボートが有名なんです。友達の娘が日本一なんです。その英雄なんです。誇りに思っているんですね。そこは、全国から集まってくる。山形県の強豪校はそこで練習して憧れの甲子園みたいな感じになってるんですよ。そういう人たちにとっては、西川町から来たっていうだけで、全国レベルで怖いって感じなんですよ。ここってそんな感じが無いじゃないですか、ここには昴学園ってすごい強いボート部があったら理想なんですけど、三重県の中にどれくらいボート部があるかわからないんですけど、その人たちが、ここをホームグラウンドみたいにしてくれるのも一つでしょうし。もう一つは、日本で一番すごいよねっていう憧れの場所にしていくということもあるんじゃないですか。この風景とか、水の綺麗さとか考えると、レベル感でいうと日本でナンバーワンクラスとしたら、もっとトップクラスの選手を呼ばばいいんじゃないでしょうか。トップクラスの選手に来てもらって体験してもらおうとか。今はコロナの時期なんで、練習できないって言うんだったらここに長期滞在して練習しませんかとかね。一番の人にここに来てもらって体験してもらって、ここが一番だというのを見た方がいいんじゃないですか。最も良いところには人は集まりますよ。月山の麓にある西川町っていうのは、月山の水が降りてきてダム湖になってすごい綺麗。町中がボートって雰囲気になって。そこから日本一が出てくるんで、どんな田舎からでも日本一になれるっていうのは誇りになるんで、そういうようなPRの仕方っていうんだったら、一回体験したいよね。それもトップが認めた場所っていうふうになったら、いいじゃないですか。一番の人を呼んで来たらどうですか。そしたら、その人が語ればいいわけでしょ。そうしたら勝手に口コミでいきますよね。

いかがでしょう全体をとおして、呉山さんどうでしょう。

○呉山委員

本当に皆さんがおっしゃっているようなことが、いい意見がすごくでていたので、私もちょっと発想がなかったんですけど、このボート一つ見ても、ボートだけにこだわらずにフォレストピアもありますけど、ホテルもできますし、そういったお客さんを風景全体をもとにして一つの観

光に落とし込んでくのが、一般の人でもこういうボート経験ができるのは面白いから、自分もちょっとワクワクしてましたし。本当にいいなと思うのは、大台町が歩いて例えば桜並木がある象徴的な町とか、そういうふうなことでもインスタ映えにもなりますし、大台町とはこういうところなんだという所が何個もなくともいいですけど、複数あればそれだけで宣伝にも使えますから、それをもとに色々活動していく上での大台町自体の可能性を飛躍的に上げていくことができるんだろうなと思って聞いていました。

○西村座長

四日市からきてどうですか。

○呉山委員

この町に来ると自然がすごい山が近くて水が綺麗。昔は鮎がすごく捕れましたけれども、正直にいきますと自然はいいけど、同時にお昼をどこで食べようかなと、そこは毎回決まってくる。いける店、例えばスーパーで買うとか。ここに来ていただく方には、複数のおすすめできる店があれば、ここに住んでいる方もそうですけど、より住みやすくなり、観光客にも活用してもらるので、そこら辺が足りないのかなと思っています。

○西村座長

ちょっと遠慮がちの町なんですよ。本当はここで一番なことをいっぱい楽しんでいいはずなんですよ。ここにいいシェフを呼んできて店を開いて、そんなところがあってもいいんですよ。選んでもらうのが一番いいんだけどもそういう人たちを呼んでくるっていうこともありだと思ふ。とてもいい取り組みをやっているんだけどもボートにしても日本一って書いてほしかった。世界でもトップレベルのボートの大会が開ける場所。レベル感は自分たちの限界みたいな感じで示すんじゃなくて、最初から世界の中の大台町。ここから始まりますっていう。山とか川とかは日本でトップですよ。日本でトップの所ですボートの大会は日本でトップです。もっと堂々とやっていいんじゃないでしょうか。自慢するんじゃなくて、それを普通に楽しめる町を作っていくっていう。コロナで東京が一番じゃないと皆さんわかってきたんで、それぞれ自分の住んでる町が一番って言うていいんだということがわかってきた。だからマリオットも来たんじゃないでしょうか。住民の皆さんの意識を変えていく。もっと遠慮しなくていいですよ。今後に向けて自信を持つ、誇りを持つということが大事なじゃないのかなと思いました。

中村先生いかがでしょうか。少しでも何か、皆さんの参考になると思っていますので。

○中村委員

高校生の活動もそうなんですけども、高齢者の方が日々生きがいをもって生活されている。そこに子どもたち若い人たちが加わることによって、若い人たちに新たな発見とか、また活用していかうかというような発想が生まれてくる。そういったところから昴学園の子たちを見てますと、地域の中で年齢の違う方たちの姿を見て大人へと成長していつているのかなという気がします。そういった地域に出ていくといった機会を与えてもらっているというのは学校にとってありがたいことだと。こういう新たなプロジェクトがある中で昴学園として生徒がどういう関わりを持てるのかなと想像しながら聞かせていただきました。学校としても高校生が関わらせていただけた

らなと思います。

○西村座長

是非ともお願いします。飯南高校で日本で一番の教育が出来る学校に出来ますよって話をしました。地域と連携して体験してこの自然の中で強い人たちを見れるという、意外と地方の末端の方が強いかも知れない。この10年ぐらい見てると、生き残って自分の知恵で伸びている人が増えているのは、地方の末端だろうなということが、だいたい数字にも出てきたんです。その生きざまをみさせるっていう有意さは以外と地方の学校の方があるかもしれない。閉鎖的に人数が少ない中でやってたら弊害もある。グループワークしたときにいつも同じメンバーでは、嫌になる。それは簡単に解消できる。日本中にある高校とオンラインでつながって、ディスカッションだけは、グループワークはズームでやればいい。となるとここにいながら東京のトップクラスの生徒とディスカッションできるし、小規模高校同士のサミットもオンラインでやっている。ここにいながら日本中世界中の生徒とつながれる。そうなればハンディキャップじゃなくなる。どの高校にも日本でナンバーワンになれる可能性がある。それをやりやすいのは地方じゃないかと。だから日本で一番の教育を目指してくださいといいました。飯南高校は目指すと言っています。南伊勢高校でも講義したら表情が変わりました。この地域をどう生かして生きていくか、子ども達が面白さを感じる。やっとそのタイミングになってきたと思うんで、高校と町の連携というのをやっていただければ面白いかなと思います。

だいたい意見交換はこれぐらいで終わって、副町長のコメントをいただいて終わりにしたいと思います。

○副町長

昴は、私は松阪におりますので、この昴との関係は、こういう町との連携ができる高校っていうのは無いと思います。昴をどう残していくか。宮川高校がなくなって昴が存在するってことが従来ありえんことがこの町では起こってますし、可能性も高いと思ってますので、かなり極端な事をやらないと、昴の存続は無いと思ってますので。そんな思いで関わっていきます。非常にいいお話をいただきました。ただ、このメンバーではかなり吸収すると思うんです。吸収できるかできないかが、この町の飛躍できるかできないかかっていうところにかかっております。今西川の町が出てきてびっくりしたんですが、ここに尊敬する井上美恵子さんって方がお見えになりました。クオリティー・ライフっていうのを町の基本理念に据えられました。町民の意識が高まってこないと今の関係人口の皆さんとのお付き合いが出来ない。ですから一流が来ていただいても一流の偉大さがわからない。これは私も痛感するんですけど、高橋忠之さんとお付き合いさせていただいたときに、高橋さんのレベルに私自身がとてもついていけなくて、年度も怒られて、それでもしがみついてお付き合いさせていただきました。そういう中で今職員にも関係人口というところがキーワードとして出てきた以上、そこまで近づくだけの努力をしようとして役場のほうでお願いしております。そこまでいくと、今度は地域へ出て行ってそのあたりはまず初歩的な大事なことだろうと思っておりますので、今日はトップクラスの皆さんをお招きしたわけですけど、自分たちがどう高まりを見せておもてなしが出来ていくかということ、人間力が大事になってまい

ります。これから、このことを更に詰めていきたいなと思っておりますし、企画は女性が多いんです。企画力を女性の視点での町づくりっていうのをこのメンバーでなんとか頑張らなあかんといい思っておりますので、女性の視点というのが今までより出てくると思っておりますので、このところを大事にしていかなければいけないと思っております。建物だけで勝負せんでもいいのかなと皆様のご意見を聞いてそんな思いも出てきました。アウトドアは野田さんがしっかりやっってもらってますし、ここはボートにもっと絡んでもらうとか、商工会の関係の方も大事にしていかなければいけない。今日の話でこの町は非常にポテンシャルが高いなということが、隣の町に住む私自身がうらやましい。もっと面白い町になるんやなと思わせていただきましたので、このところ皆さんが動きやすい体制で動いてもらうように。島根なんかの学校へ中村先生にも行っていただく、また西村先生には全体的にサポートしていただいて、皆様方には大変これからもお世話かけると思いますが町長は挑戦する町にしていくと言っておりますので、かなり思い切ったことをやらせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

閉会

○企画課長

皆さん長時間にわたりお付き合いいただきましてありがとうございます。また会議終了後もですね、改めてお気づきの点等あれば事務局なり担当課なりどちらでも結構ですので、ご連絡いただければ非常にありがたいですのでよろしくお願いいたします。また次回の会議では、本日いただいた貴重なご意見を参考に新たな動き等を報告できるよう努めてまいりますので引き続きよろしくお願いいたします。それではこれで閉会とさせていただきます。本日はありがとうございました。

閉会 (12時00分)